

繪  
啓蒙訓話  
佐澤太郎譯述

特37

989

052789-001-6

特37-989

繪入啓蒙訓話 卷1-3

佐沢 太郎/訳

40

M7

CAA-0002



# 物語

明治七年六月廿日官許

佐澤太郎譯述

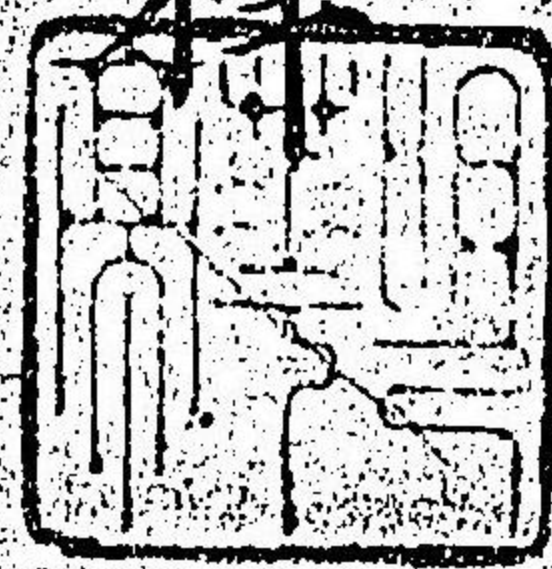
## 繪啓

東京資料館

類屬冊函行級  
三冊  
一冊  
七冊

## 口話

咀華亭藏梓



凡例

一 此書ハ西洋の紀元一千八百七十二年即我  
神武天皇紀元二千五百三十二年フランス國

の婦人カルパンチエ、シャル、テロン、あつた。ひ  
の編める所ありて、父母兄弟又も  
人の師なる者之を子供に説き聞せよ。事實

を知らしむべし。為の書ありて、文字を教ふる。  
為に著せしものよ。あつた。

一 予今此書を譯するに當りて、我國の子供に曉

女子部

且一五

「さうとき物の他、品の以て之ふく、および、フランス國の事と、いふとも、うろろ、日本の事を以てする、と、いひ、まゝ、あつらひ、

一、すゝ、卷の末、毎條の問を置くもの、今日、一箇條を幾度も説き聞くと、よく、其事柄を會得せしめ、翌日、至り、子供、對ひ、之を問試て、答へ、いめん、が、為あり、若、明、答、あ、事、能、い、ざ、れ、ば、ま、ま、よ、く、同、條、を、説、き、聞、し、其、翌、日、至、り、て、之、を、問、べ、し、此、の、如、く、い、て、容、易、に、答、え、

ふ、至、れ、ば、次、の、條、を、説、く、べ、し、決、し、て、早、く、次、の、箇、條、を、説、く、べ、し、と、あ、り、れ、若、し、長、き、條、或、は、む、ろ、う、と、い、ふ、箇、條、に、至、り、て、は、四、五、日、の、間、に、一、箇、條、を、説、き、終、る、も、妨、あ、し、必、竟、子、供、の、事、柄、を、諳、み、覺、ゆ、る、を、以、て、目、的、と、す、べ、し、  
一、務、て、婦、人、子、供、に、分、り、易、さ、を、本、意、と、す、れ、ど、も、子、供、進、歩、の、後、小、學、校、の、教、科、書、を、讀、む、時、に、至、り、て、要、用、し、る、べ、き、語、を、止、む、事、を、得、る、通、例、の、譯、字、を、用、い、し、豫、識、り、置、け、ば、其、益、少、く、ら、ざ、

つを以てあり。

一 此書を分ちて、三巻と為さ、ちと左の如し。

巻の一

上 地理學

下 博物學の手引

巻の二

動物學

巻の三

上 植物學

下 金石學

附録 四季月日時刻の事

以上

紀元二千五百三十四年五月

譯者 識

繪入 啓蒙訓話卷の一上

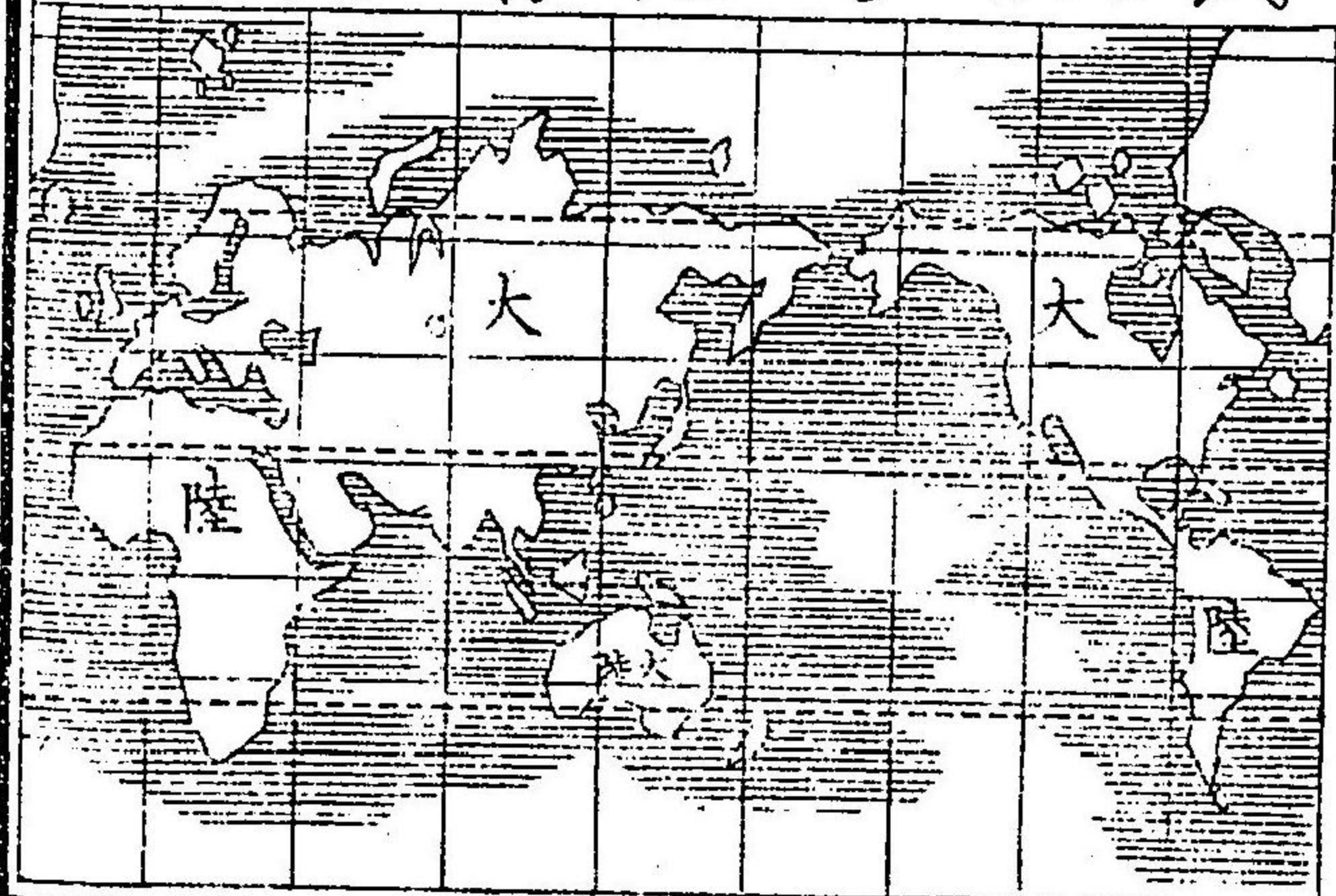
備後福山 佐澤太郎譯

○地理學

第一 土地と大陸との事

子供等よ。汝ら。山。塔。登り。あ。ありや。  
ま。て。く。高。所。四。方。を。見。れ。町。在。の。家。  
あ。ら。び。ふ。園。を。初。め。と。田。畑。牧。場。河。小。川。あ。ど。  
皆。一。目。不。見。渡。す。べ。し。の。近。き。物。ハ。夫。々。

見分らるれど、遠き物を見分難く甚ど遠き所の  
 木と石との差別もつらびを、嵐色の帯を引け  
 るが如し、ちれを、遠方としふ  
 嵐色の帯の先あり、最早一品  
 もあさぐちとく思われん、さ  
 れども中々、さふあらげ、其先  
 あり、猶ありこの土地ありて  
 その土地あり、大抵人も居り、  
 田畑もあり、森林もあり、町在



もあり、動物も、うとあり、けとあり、うか、も居る  
 あり、汝のちれまぐよく、知れる、土地と異る事ふ  
 し。

廣き土地の一續、大陸としふ、それゆゑ、大陸  
 の、地球としふ、もの、中あり、大あり、一續あり、

第二 旅行の事

汝ち己前より、旅行を、しつる、ちとありや、旅行と  
 り、此の土地より、他の土地あり、ゆくをりふあり、故  
 り、汝が、住所の、町あり、より、外の町あり、

小、ゆくり、をなまら、旅行あり、あらし、ちれ、旅行  
 の、小、さ、りの、あ、る、大、ある、旅行を、する、人、の、遠、ま、土  
 地、小、ゆ、く、あ、る、志、く、して、元、の、所、小、歸、れ、其、見、と  
 り、所、の、土、地、あ、ら、び、く、人、間、の、有、様、を、誌、し、し、ら、や  
 う、あ、る、草、木、あ、り、し、如、何、様、の、動、物、あ、り、し、あ、ど、を、  
 話、す、あ、る、此、の、如、く、旅行を、し、く、人、の、説、話、相、集  
 り、て、つ、ひ、小、地、理、學、と、し、小、學、問、と、し、あ、る、あ、り、地  
 理、學、と、し、地、球、上、の、模、様、を、識、る、學、の、名、あ、る、  
 第三 丘と山との事

遠、く、旅行を、せ、び、と、も、ま、こ、その、一、端、を、見、る、べ、し、  
 汝、近、邊、の、野、小、し、ら、づ、と、も、必、む、二、三、箇、條、に、見、得、る、  
 と、も、ろ、あ、り、し、汝、切、ま、が、故、小、之、み、心、は、ら、ざ、る  
 の、も、吾、今、汝、が、必、む、既、小、見、る、事、を、し、ん、汝、と  
 く、聞、け、汝、野、小、し、ら、づ、と、も、何、れ、の、土、地、あ、る、也、皆、  
 小、ひ、く、あ、さ、も、の、小、に、あ、ら、び、必、む、所、々、小、坂、あ  
 り、坂、に、總、て、下、り、易、し、所、小、より、下、り、あ、り、急、ふ  
 る、所、あ、り、ま、と、歩、む、内、小、に、登、路、あ、り、登、路、を、や、  
 小、に、必、む、息、切、す、べ、し、坂、の、う、ち、小、に、峻、く、し、登、

下とも小危き所もあり。

子供等汝骨折りて。やうやう

登路我登り終らば。窠も高く

し。目の遠方小届く所あり

と。づー其登路を。總て丘と

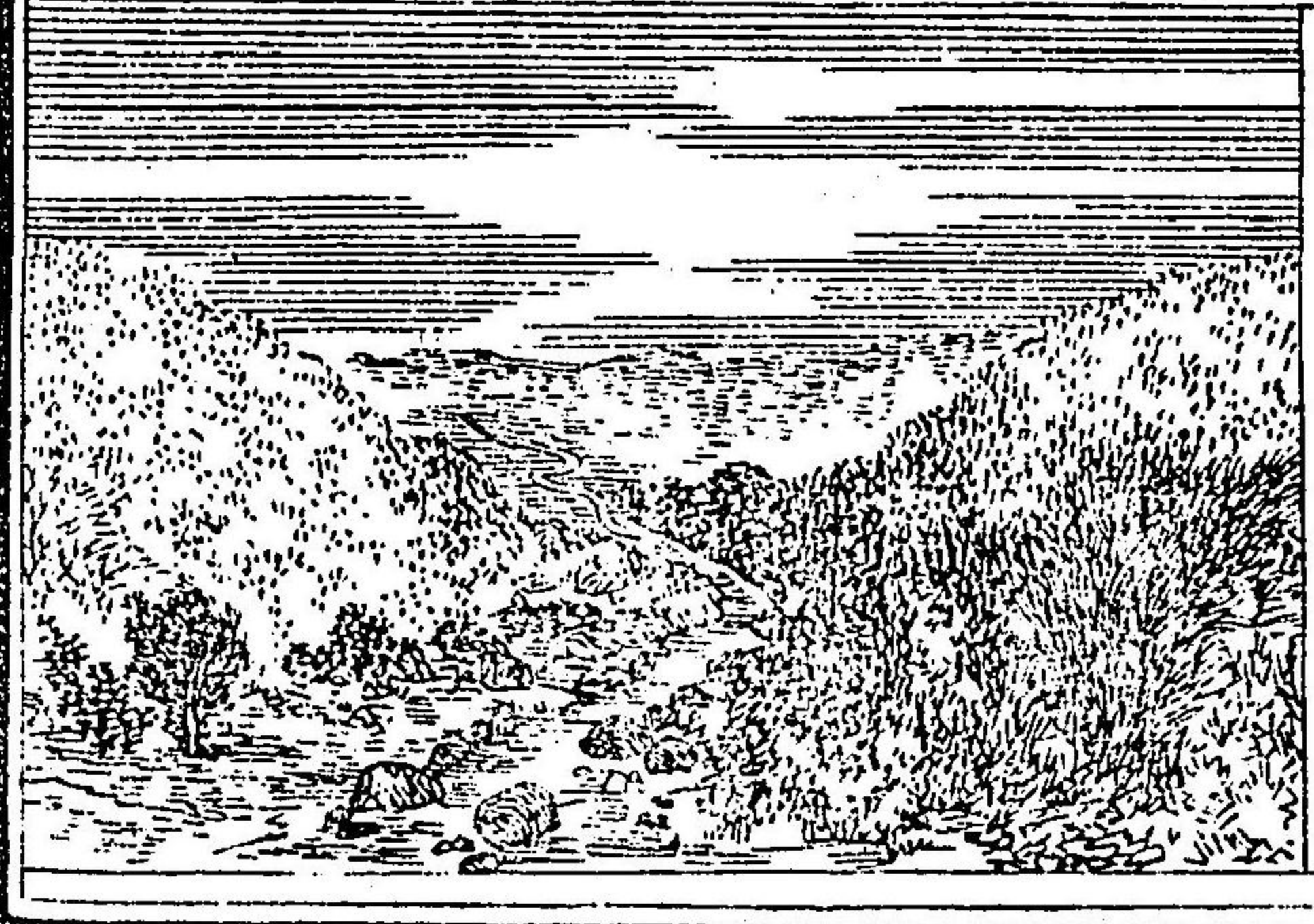
り。丘の窠も高き所を。頂と

り。あり。丘より其高き

高くし。登り難く。子供等

頂まで。あちとあちと

丘と小谷の圖



りのあり。之を山とりよ

第四 谷と平地との事

丘と丘との間又山と山との間小窪めり所あり

り。之を谷とりよ。

丘と丘との間遠ければ其谷廣く。近ければ其谷

狭し。之を小谷とりよ。

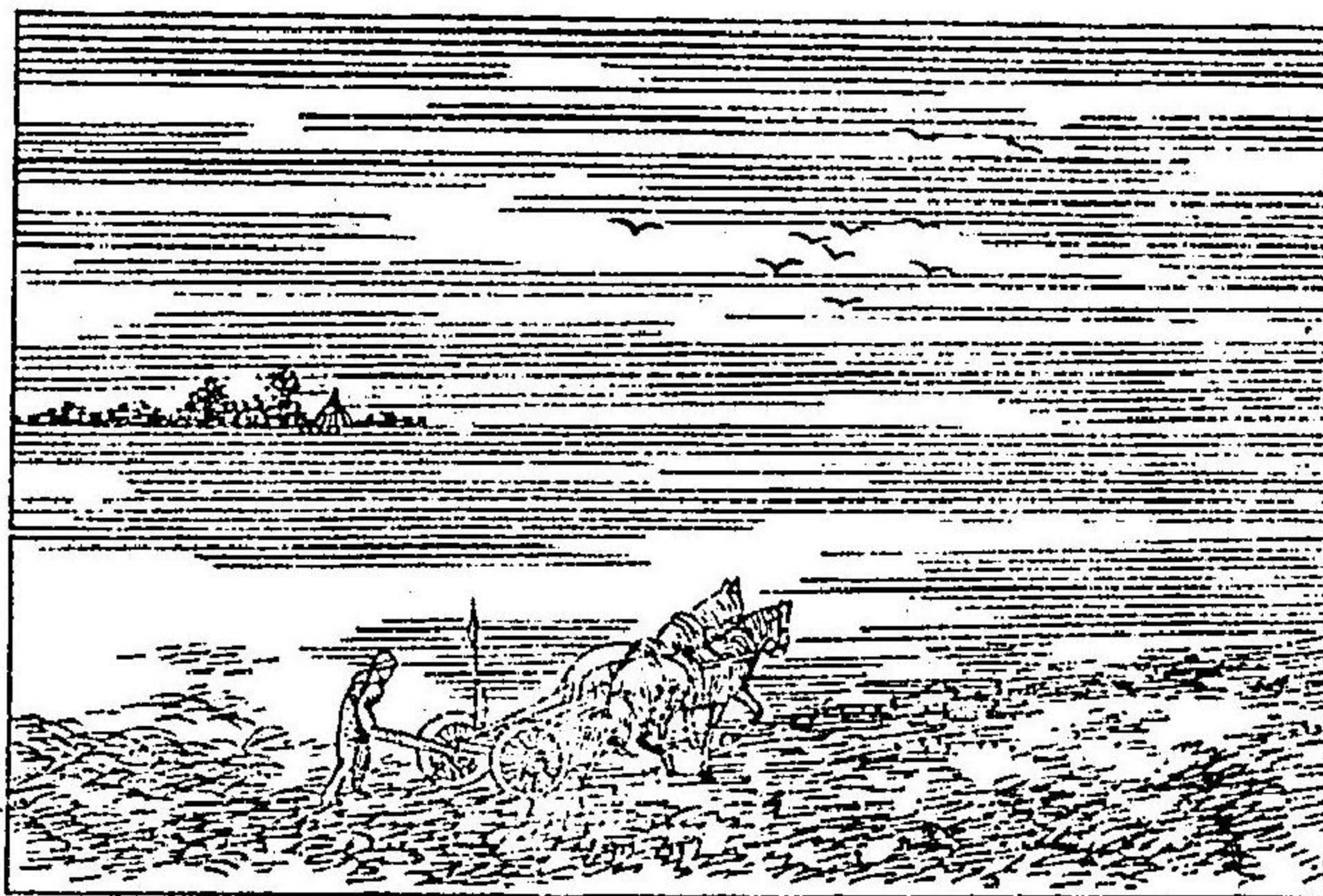
汝若丘と丘との間小あり。牧場小あり。ちれ

ま。より。谷小居るあり。谷の間小居ると。丘

目の前を遮りて。丘の先に見る。づららば。



平地の圖



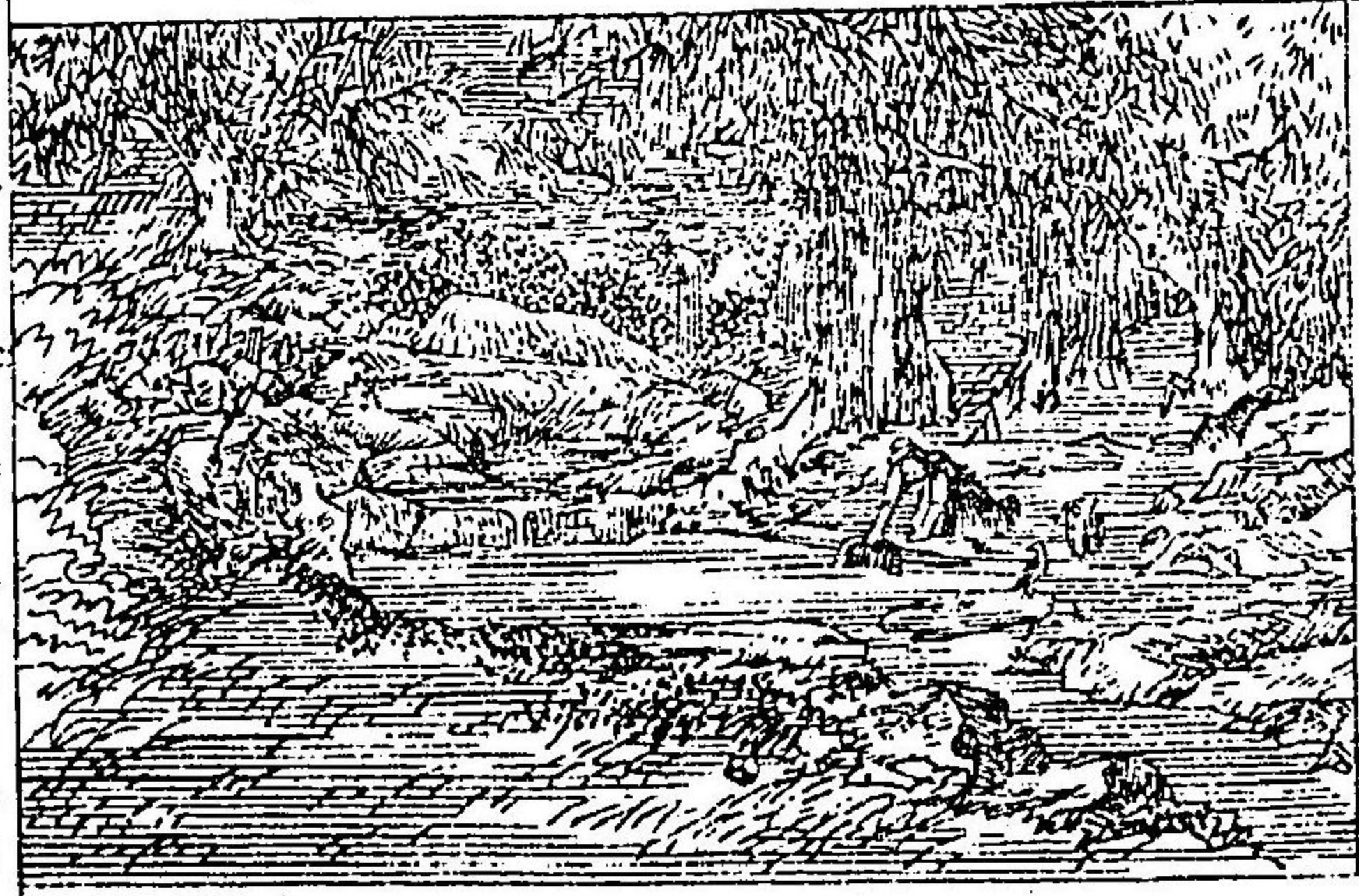
第五

水源と小川との事

まゝ土地平ゆへ大抵、  
 びくの、あき所あり之を平地  
 とりふ。  
 牛馬をつれゆき草を食しむ  
 牧場あらびふ米麥との外  
 入用の品を植ふる所の田畑  
 は多くの谷底又ち平地にあ  
 りとれ。

谷間の田畑並に牧場の平ある所、  
 出る小川あり事多し、子供  
 等も田畑の隅又ち木の下に  
 於て必ず泉を見とるあつた  
 る。其泉を水源と云ふ。  
 泉の水は土地の内より湧き  
 出て流れて自然に土地をけ  
 り溝をあら其溝を小川とい  
 ふ。

水源と泉の圖



小川の初も甚ど狭し子供もよく飛ちをづ其水もすも甚ど火さぐ故に底の石あど明み分り易し。

ちく流るふ。あの小川も浴てらどれが外の小川之小落合て、ひろき小川とあり其水も亦増して既ち飛ちず、づららび之をさすふ、橋あく有づららず。

小川の水も流れ下りて、次第に其水源茂遠ざる。りのあり其證據の草を水の中へ弁れ、水そ

の草と共に遠く去るを以て、見づべし。但し其水の早く流るりのあり、遅きものあり水の流ふ。全く音あきりのあり、或ち小を響あきりのあり。す。石も行當り或は石の間を廻りまわし、石を飛ちずあり。激流の小川あり、夫故あり。右の如く水の流る、窪き底を小川道と、りひ小川道の両縁を岸と、りふあり。

第六 川乃事

小川と小川と落ちて、一の小川道も集まると廣き

小川とある事の上、ゆるゆる。如し其廣き小川  
相集りて、更ふ。又大ある流とあるを、川とい  
ふあり。

川道の、小川道ふ、くらぶれ、甚ど廣し、是れ川の、  
水多き、ゆゑ、く、あ、あり、ま、小川より、  
深き、故、子供等、之、落れば、動も、死を  
う、あ、あり、恐、づ、き、りの、あり、  
右ふ、り、く、ろ、が、如、く、川、の、深、く、し、て、廣、く、か、ゆ、ふ、  
大抵舟を浮べて、乗り行くべし。

第七 河の事

あきとの川相集りて、更ふ、廣くして、深き、  
流とあり、海へ入る、りのを河といふ、  
汝、り、ま、ど、川、ま、り、の、河、と、り、あ、もの、を、見、む、や、汝、  
の住所の町、の、近邊、の、流、あ、や、總て、流、  
の、皆、夫、々、名、あり、て、外、の、流、と、分、つ、事、人、は、夫、々、  
名、あ、ら、が、如、し、汝、等、も、ま、ま、と、其、名、を、知、れ、り、や、  
り、あ、ら、が、れ、の、あ、ど、り、さ、り、ん、あ、ら、び、  
まん、ん、の、り、た、の、あ、ど、り、あ、ら、び、  
海、の、事、の、後、の、話、も、し、今、の、左、の、三、ヶ、條、を、

よく諳み覺ゆべし。

一 水源より出る小ま流り、小川あり。

一 廣き小川あましく集まるる。一の流とあれり

を川とらふ。

一 多くの川相合しとあり。海へ入る者ハ

河あり。

第八 池と湖との事

およそ水の性ハ土地の傾けるに従ひて低き方

へ流る。りのあり。その傾ける處つさて平地と

あれハ川道俄ハ廣がり、水溜りて流れず、沼とよ

るハ子供もよく知れる所あり、其流れざる水若

深くして、以し廣けれハ池とらひ、更ハ大あれハ

湖とらふ。

湖の中あり、なるをど、大少く、日數を經されハ、

一廻すべし、うらぎる程のりのあり。

第九 海乃事

吾りよ汝ハ海のちとを話さん、あまの月の數を

經ざれば、一廻まべし、うらぎる。やどの大なる湖の

池と島との圖



邊へふら立たて向むかひの岸しづみ即濱邊すなはたを見みんと欲ほむとも速はや

状あつをま想さう像ざうすべし是これ即すなは海うみあり  
海うみ大おほき舟ふね不の乗のらざれば  
渡わたるべくらず  
川がの堤つとあらびふ池いの岸しづみ今いま  
ちくみらしそどともも汝等なんぢらよく  
その摸も様やうをし知しりまくく一いと  
れど海うみ大おほき舟ふね不の乗のらざれば  
大おほき舟ふね不の乗のらざれば以もつてあちらの岸しづみ即すなはた  
濱邊すなはたを見みんと欲ほむとも速はや

くら見みるべくらび

海うみの水みづ潮しほ汐しほとらしふ鹽しほ氣けありて苦く鹹し故ふ  
飲のむべくらず川の水みづあらびふ池い乃な水みづ大おほき抵鹽しほ  
氣けあし飲のむべくらず事井いの水の如し

第十 鷺の事

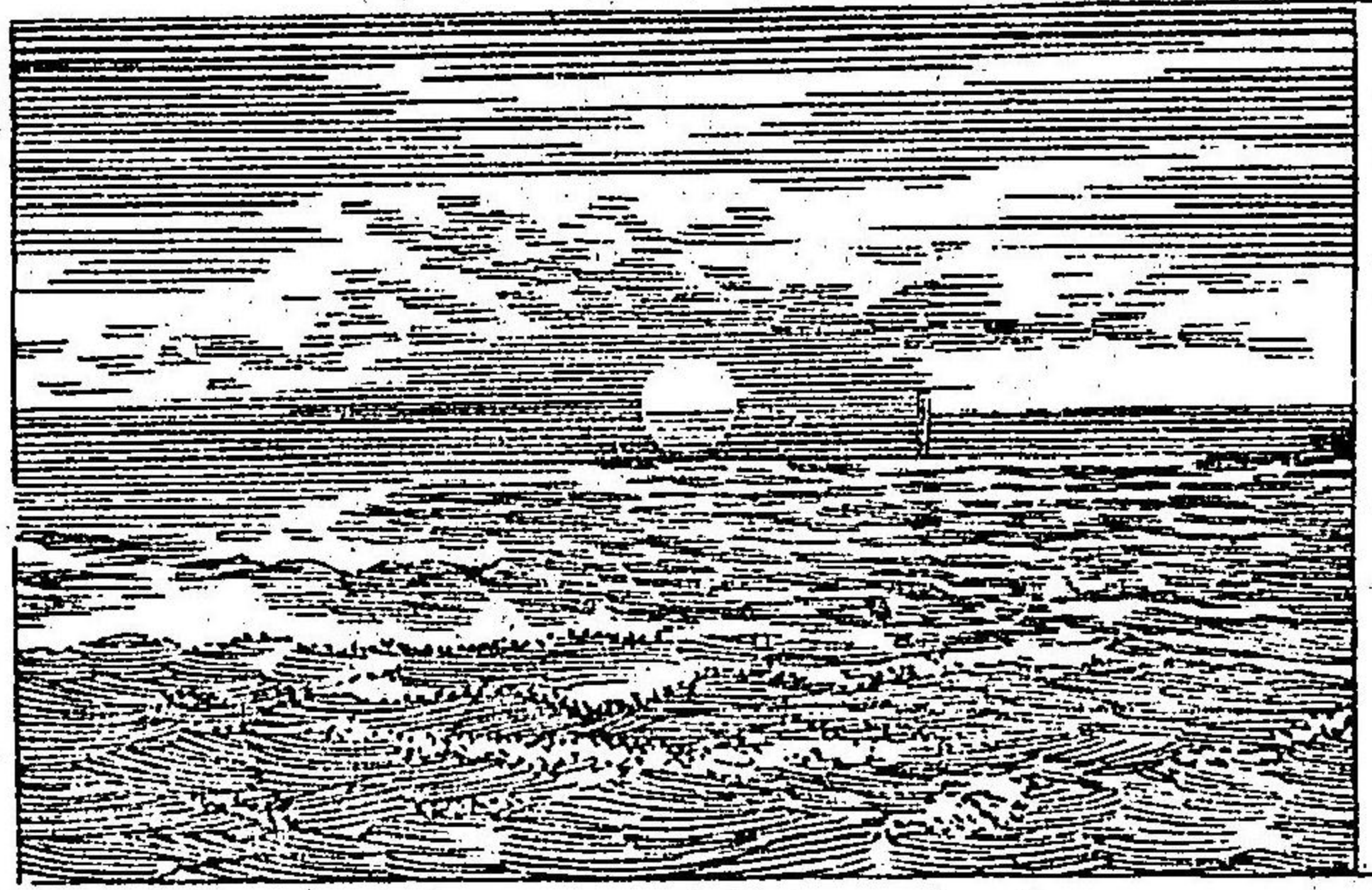
上うみりくら沼ぬま池い川がの中なかに岩ままの土の高き所  
ありて水みづ其その四よ方かたを取巻まき舟不の乗のらざれば之のみ  
行いくべくらさるのあり汝等なんぢら之を見みるべくらず  
ありやその高き所を島とらしふあり凡て嶋の水

其四方を取巻く所の土地と  
知るべし。

海の中おも亦島多し其内小  
き者あり大ある者あり其大  
ある島あり町在田畑森林山  
川もどある者ありしもの  
ありし數多の月數を經ざれ  
ば廻るべしうらさる島あり。

第十一 氣候乃事

海の圖



夏の熱まことの子供等もよく知る所あり殊に  
晝日の光強く日向の熱烈なるが故に子供等  
も暑あらず日陰に於て遊ぶらん冬は之を反  
して寒く時として雪降る事あり小川あり氷  
を結ぶことあり故に家の内は火を以て之を煖  
むとの上は等々の母は汝等も多く衣服を着する  
ありべし。

土地よりして夏冬の差別あり一年中日本の  
夏より熱き處あり此土地を熱國とす。



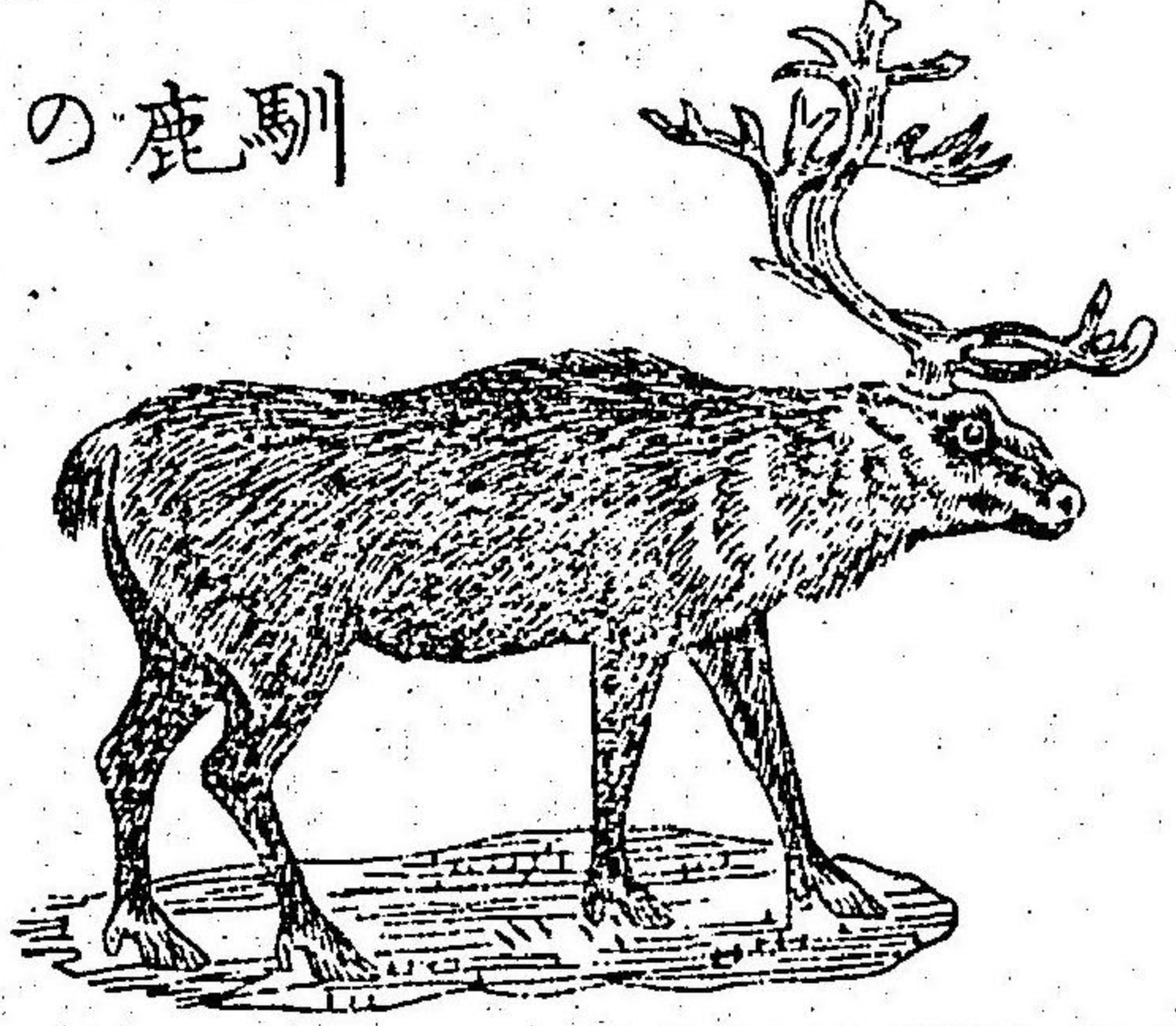
日本あり。桃櫻あざの木あり。あれ等ハ寒暖適度  
 國の植物あり。之を寒國ニ植うとも。寒の為み。  
 枯れ。生長もあつた。あつた。りぢ。  
 寒國あり。縦多し。縦ハ寒甚し。と。りくども。決し  
 枯れざる。りのあり。  
 夫故ハ地球中の植物即草木ハ氣候より。一  
 様あり。いと。知る。

第十三 動物の事

動物也。植物の如く。その國の氣候より。一  
 様あり。いと。りのあり。汝等も。よ。牛馬犬猫を  
 知る。あ。く。し。是皆日本ハ生る。動物あり。  
 又曾て。虎駱駝象を見し。  
 事あり。此類の動物ハ熱國  
 より。捕へ来り。見せ物。ま。  
 る。ま。で。あ。て。決し。日本ハ生  
 る。りの。ふ。あ。ら。び。

ま。曾て。馴鹿の話。聞し  
 ると。あり。や。馴鹿の角ハ長

馴鹿の圖





して灌木の枝の如し是は寒國の獸なり日本  
の動物もあらはれ

右ふりくろが如く何れの國も皆動物も居り  
植物もありくろ氣候の違ふよりてその種類を  
異なせるのもあり

第十四 地球の分の事

通例地球を大別して五とあしあれを五洲とい  
ふ五洲はアジア洲アフリカ洲エウロパ洲アメ  
リカ洲および大洋洲あり

アジア洲アフリカ洲エウロパ洲元一續あり  
此故ふ之を一大陸と為む大陸の最も大あり  
者あり

アメリカ洲一洲あり一大陸あり  
大洋洲は大洋中乃一大陸とありとの  
島とよりあれ一洲あり大洋の中ふありが故  
に大洋洲とい名付しあり

第十五 帝國日本の事

五洲の内アジア洲に甚どよりちと土地あり吾

も汝もとも住む所ありて帝國日本とりよ日本  
 本い吾等の本國あり本國とりよの吾父母の國  
 ありて吾等もちくみ生れ平生親類友達と共々住  
 む所の土地あり  
 吾等ととも日本み生れて吾等と同じ言葉  
 用ひるのい皆日本人あり  
 日本三府六十縣十一洲と藩屬一ヶ國ありて  
 其内町の最も大ありのい東海道武蔵國の東  
 京あり東京の吾等の天子のりまを所ありて

亦日本政府のあり所あり



繪入啓蒙訓話卷の一上終

繪入啓蒙訓話卷の一下

備後福山 佐澤太郎譯述

○博物學の手引

五感の事 五感といふ物を見音を聞き香を  
 嗅き食物を味ひ搜りて物を知るをいふ。  
 未だ目耳鼻舌皮膚を知らざりて子供は  
 前以てよく之を教つておくべし。  
 汝よく聞今吾汝を面白き事を話さん。

吾若し手拭を以て汝の目を覆ひ綿を以て耳と  
 鼻とを塞ぎ紐を以て手を縛り其すく汝を抱き  
 汝のりきど知らざる所あり其所あり美麗き花  
 もあり菓もあり鳥も居り子供も居り花園の中  
 小置ぐば汝花園の中へ立つのそあり自分今  
 何處へ居る其處へ草木あつる日輝く一  
 らざらうを知らじ一のそあつる書く夜も  
 知つちとあつるづ一何故此の如くあり  
 や是汝目を用ゐる事あつるづ故あり

鳥の鳴けども汝之を聞く事あつるづ子供来て  
 説話を仕掛つとも汝之を知つとあつるづ  
 何故とらふみ耳に栓ありて聲響を聞くちと  
 あつるづ故あり  
 花ありよと香あれども鼻に栓ありて之を  
 嗅ぐとあつるづ故に遠く花あつるを知らず  
 手ら縛られて用かづぐらづる故に搜りて  
 何所へ居る周囲あり如何あつるのあつるを  
 知つ事あつるづ

汝うしろいまい見みるちとあそむに聞きくことあそむを  
 嗅かばちとあそむを搜たることあそむべしと全ぜんく  
 周しゅう圍ゐのりのを知しることあそむを得えざるが故ゆゑに一いつ歩ぽも  
 進すすむちとあそむを若もし進すすむ木き突つ當あり垣かき不ふ  
 行ゆ當あり石いし不ふ躓つままり池いけ不ふ落おるの恐おそれあり斯かく  
 何なにをも知しる得え不得え何なに事ことをも為なすことあそむべ  
 ば恰あやうも死し人にんの如ごとくあそぶべし  
 ちの時とき若もし手ての紐ひもを解とき耳みみと鼻はなとの栓せんを抜ぬき  
 目めの覆おほい除のけあぐ忽たちち夜よ乃な明あるがぢと眠ね

の寤さとらるが如ごとく汝うしろの驚おどろきと喜よろこび如何いかぞや立た派はふ  
 う花はなも見みるべく木きも見みるべく路みちも辨わり鳥とりの鳴ない  
 ちも聞きこえ花はなの香かをも嗅かぐ果くだも取とり食くふべし  
 歩あむとも走はるとも物もの不ふ突つ當あり恐おそれあり池いけ不ふ落お  
 るの憂うれれあり其所そこにありの皆みな見みるべく周しゅう圍ゐ  
 ある物もの夫それ々ごとく樂たのしみとあそぶべし

視感の事

前まへ言いつる如ごとく手て拭ぬぎを以もつて汝うしろの目めを覆おほり  
 汝うしろ何なに故ゆゑに自みづか分の居ゐる所ところも知しられず周しゅう圍ゐの物ものを

も。知り得ざりや。され甚ど。解り易き理あり。汝其  
 時ハ汝の目を用かろ。あとのさるるが故あり。  
 左まれば。人間をく。物を見せむ。その目  
 あり。目を以て。物を見るの働を視感とらふ。凡そ  
 しく。物を視る。あとも。明視。まこの明目とらひ。目  
 其働を失ひ。盲とある。あとも。視を失ふとらひ。  
 しく。視感を失ふとも。りふあり。  
 夫故ふ。目を物を見るの器械あり。即視感の機  
 関あり。盲ハ視感ある。不幸の人あり。憐むべきも

のふ。あらげや。

聽感の事

吾汝の耳を塞ぎて。何故。何事をも聞くとあ  
 せざりや。と問わ。汝必む。耳ハ人間をく。聲音  
 響を聞らしむ。その機關あり。故ありと答ふ。  
 あん。

聲音響を聞く働を名付て聽感とらふ。あ  
 汝も。よく知る如く。多くの人の中あり。耳の遠ま  
 りのあり。すこの火しも聞えざるのあり。總て。

之を聾とらふ聾の聽感を失つるのあり。そぐ  
 其之を失ふあとの多きと火きとふよりて耳の  
 遠きと全く聞えざるとの違あるのあり。聾の  
 音樂を聞きて之を樂むとあつたは又他人と  
 説話しく用事を弁するとあつたは是もすこ  
 不幸の人ふあらびや。  
 汝も生れあがらみしてよく他人と説話すふ  
 あらび追々他人の説話を聞き習ひあり汝の  
 弟あつひの妹のりまご幼くして説話をあつと

あつたぎるりのあらびやその今説話をあや  
 あつたぎる弟すこい妹も追々他人の説話殊ふ  
 母の説話を聞き習ひ遂み自らよく説話をあつと  
 至る元汝が説話を學びいと異なるあつとあつ  
 汝のよく他人の説話を聞くが故ふよく説話を  
 學び得しあり不幸の子供も生れあがらむ聾あて  
 火し他人乃説話を聞く事あつたは遂み全く  
 説話を學ぶとあつたはあつたぎるりのあり之を啞と  
 り

嗅感の事

吾若し汝も蕃薇乃花百合の花すこし梅の花と  
 興つあふ。汝一度花を見ても後必之を鼻に附け  
 て其香を嗅ぐあらん然れども縛らえて花園の  
 中へ居る時花の香を嗅ぐとあそとあそと鼻は是鼻  
 小栓何るが故あり此香を嗅ぎ之を知り分る。  
 働を嗅感とらふ。  
 天より人へ嗅感を授けしるりの只香を嗅ぎ  
 之を樂しむるが為のそふあはび之を以て人へ害

あふりのも知り分るるが為あり。  
 食ひてよろしきもの快き香あり毒ある物り。  
 大抵其香快くらざるものあり。

味感の事

汝のいうごとく食物の味を知り分るるや口の  
 内へ於て之を知らるる味を舌の上と  
 舌との機関あり此働を味感とらふ。  
 養生の為よらしき滋養物を食ふ固より快  
 しきりあがる天より人へ味感を興しるるも



只食物を味ひて快くしむるが為のそふあり  
べ食ひてよろしくさりのと害ありのそを知ら  
分けしむるが為あり味の悪くさりの通例毒  
あり食ふべし

觸感の事

汝是近知らざる。珍らしき品を手を觸れば汝  
必大に怪しき思を起しあらん。総て物をく見  
るのそめて之を觸れざれば其質の軟あても硬  
さも重さも軽さも温あても冷あても皆知るべ  
し

くべ。此の如く觸れて物の質を知る働を觸感  
と云ふ。

觸感の機關は手あり。あつし。蹴あて。歩まむ。目を  
以て見むとも。其踏む所の物の草。石。瓦。  
知るべし。あつのそあつべし。身體の他部を以て物  
を觸るとも。まことよく。その温あつと。冷あつと。質  
の緻密あつと。粗糙あつとを。知りかくべし。ま  
れ。身體の皮膚を総て皆觸感の機關あり。但し。  
搜りて窺もよく。子細よく。知りかくるの。手

りとい

右に言へるが如く人への皆五感あり。五感といふは視感聴感嗅感味感あつて觸感なり。視感の機關は目あり。聴感の機關は耳あり。嗅感の機關は鼻あり。味感の機關は舌あり。觸感の機關は皮膚、手足あり。

光の事

汝夜寝床に入るとき、汝の母燈を消さば、汝の周圍の一面の黒色あり。程目を開くとも、最早

一品も見分る事を得ざるべし。前にも言へるごとく、目の視感の機關あり。目を開きて物を見ることあるがごとく、何故ぞや是光あるが故あり。光の物を見つゝ、欠くべし。若し光あるれば、近き周圍の物も見ゆべし。目もまた其働を為す事あるがごとくあり。

晝の間吾等を照らすものなり。日の光あり。されど、日の毎日必見ゆべし。そのふあはれ、殊も冬の雲日を覆ひて、之を匿すこと度々あり。その時に汝

由。知れ。う。が。如。く。日。の。光。少。く。弱。く。物。を。見。る。も。  
亦。火。し。明。く。あ。ら。べ。

雲。ハ。日。を。覆。ふ。と。し。く。ど。も。全。く。其。光。を。匿。む。者。ハ  
あ。ら。び。恰。も。日。と。吾。と。の。間。ハ。幕。を。張。れ。う。が。如。し。  
光。の。一。分。ハ。必。幕。を。通。し。く。吾。子。届。く。あり。

日。の。全。く。照。ら。さ。ざ。う。時。ハ。即。夜。あ。る。夜。物。を。見。う。  
み。ハ。必。燈。を。用。の。う。燈。も。亦。光。あ。れ。ど。も。日。の。光。ハ  
較。ぶ。れ。ば。其。弱。き。ハ。汝。も。よ。く。知。れ。る。所。あ。る。夜。も。  
亦。全。く。暗。黒。あ。ら。ざ。ら。ず。稍。光。あ。る。と。り。これ

も。月。の。光。あ。り。され。ど。も。日。の。光。ハ。較。ぶ。れ。ば。明。あ。  
ら。び。其。上。月。ハ。毎。夜。出。る。の。み。あ。ら。べ。

色の事

夜。汝。を。起。し。て。吾。が。持。て。る。所。の。物。ハ。何。色。あ。り。や  
と。問。う。汝。ハ。あ。ら。び。知。ら。ず。と。答。へ。ん。ま。何。故  
み。知。ら。ざ。ら。ず。や。と。問。う。暗。黒。あ。ら。び。故。ハ。其。色。を  
見。る。と。と。あ。ら。ず。と。答。へ。ん。さ。す。れ。ば。色。を。現。す。  
の。ハ。光。あ。り。光。あ。ら。れ。ば。色。も。亦。あ。る。事。あ。し。  
汝。も。よ。く。色。を。見。分。る。あ。ら。ん。赤。と。黄。と。緑。と。ん。

間違ふとあるまじく、普徹の赤色山吹の黄色天  
 の青色あつて木の葉と草との大抵緑色あり、其  
 外花の種々の立派ある色多きは、汝もよく知  
 れる所あり。

諸の色の基本と為るもの、三色あり、青色黄色赤  
 色あり、その三色ありる之を配合すれば、諸の色  
 を生ずべし。

青色と黄色とを配合すれば、緑色と為る、夫故に  
 緑色の複色なり、  
 青色と赤色とを配合すれば、桔梗色と為る、桔梗  
 色も、すく複色なり、

黄色と赤色とを配合すれば、又一の複色と為る、  
 其色甚ど橙實の色に似たるを以て、橙色と云ふ、  
 汝日没の雲を見らば、あつとありや、其色輝きて甚  
 綺麗あり、此色の即橙色あり。

緑色と桔梗色と、橙色との皆複色なり、其本と  
 青色と黄色と、赤色との雜りある一色あるは

故不單色とらふ

形乃事

子供等もよく木の葉を知り分くべし。木の葉と大抵皆綠色あるふ。よく梅の葉と桃の葉と櫻の葉とを見分くるも其形の同じくざらざら故は形とい天然のものと人工ある成れる者との差別あり。總て方ある圓ま長と短と等の違をいふあり。

夫故不物の形よく其物を知り分くる。為めの

目徴あり之を知り分くるの視感と觸感とあり。

物の形種々あり。今その一二をいす。橙實と殆んど球形あり。柳の葉長くしと尖り。金銀の貨幣圓くしと平あり。

三有の事

夫音を聞き物を搜り物を見るも必用ある者なり。手と耳と目あり。されども目と耳と手とあれが物を見音を聞き物を搜るも足れりとすべから

ず若ちれめく足れりとて、木像も亦耳あり。  
 手あり目ありその上小口もあり鼻もあれども、  
 見るちとあるも聞くとあるも、  
 あとのぎらあり若木像もよく物を搜り音を聞  
 き物を見ると言ても、汝必む大笑ふべし然ら  
 ざれば又汝を嘲弄すと思ふべし。此の如く夫々  
 の機關ありて其働を為す事あとのぎらなり。何故  
 ぞや何の外も足らざるもの、あつべし木像あり  
 生命ありさすればその足らざるもの、生命あり

あつべしや生命あり故に、機關あれども其働を  
 為すちとあつべしぎらあり。  
 動物の生體あり故に、よく音を聞きよく物を見  
 よく歩むあり。彼の猫を見よ。猫はよく物を見入  
 呼ぶべしよく之を聞きよ。食物を與ふれはよく  
 其心を解る。是猫あり生命あり。且猫は、  
 食物十分あれが喜んで遊び人之を赤ては痛を  
 覺ゆるものあり。  
 彼の犬を見よ。犬は、その主人を慕ひ甚ど主人よ



じ。遂ついに花はな咲さきふ至いたる心こころを用もちわて。水みづを灌そぎ。之これ
 を作つくる。木きを益えき生長せいじやうし。花はなも亦また綺麗きりあり。然しかる
 ぬ。水みづを灌そぎぬ。又また、その枝えだも傷きずられ。その木き
 痛いたむを覺あげ。葉はの黄き色いろと為なり。花はなも亦また凋しぼむ。若し
 く之これを土つちより引ひ拔ぬけ。其その木き枯かれて。再またび芽めを生は
 ぜ。葉はも花はなも共ともに枯かる。ゆゑのあり。ちれ。蕃ふ薇き乃なり
 死しするあり。十じゅうべて。死しするもの。元もと皆みな生命せいめいある
 が。故ゆゑあり。然しかも。蕃ふ薇きも。亦また生命せいめいあるもの。
 あらざるや。

蕃ふ薇きの生命せいめいあれども。自みづから動うごきて。その居ゐ所ところを變か
 へるもの。みづから。汝なんぢの。ら。蕃ふ薇きの歩あ行ぎやうを見み
 事ことありや。果たまして。是これなるまで。亦また動物どうぶつあり。五ご感かん
 あれども。蕃ふ薇きの五ご感かんあり。一ひとつ物ものを見みる事こと
 あり。音ねを聞きくことあり。是これ皆みな動物どうぶつと異ことなる
 所ところあり。

蕃ふ薇きの土つちに植うゑて。生せい長ちやうする物ものあり。故ゆゑに之これを植う
 物ものと。米こめ。麥あわ。梅うめ。松しょう。櫻おう。桃とう。杉すぎ。その外ほか。草くさ。木き。總すべて皆みな
 植物じふつあり。諸しよの植物じふつの。一ひと世界せかいを名な付づく。植う物もの有あ



と、いふあり。

汝此石を見よ。石は自ら轉ぶ物なり。外より之を動かすみあはざれば、自らも同所ありて、自ら動くことあり。自然知覺もあし。又五感あまが故に、物を見る事あり。音を聞く事あり。亦ち之を碎くとも、痛を覺ゆることあり。右に言つるが如く、石は自ら動くことあり。音を聞くことあり。物を見ることあり。之を打てども、痛を覺ゆる事あり。故に動物は、つねに又芽を

生ずる事あり。花の咲事もあまが故に、植物は、つねにすくすくと、生命あり。機關あり。物あり。石のこふあはざ、土、砂、鹽、石灰、金、銀、銅、鍊、鉛、錫、皆此の如し。此類の一世界を、金石有とらふ。右の話あり。動物、植物、金石の事あり。びも、動物有。植物有。金石有の事あり。既小解りたらん、いまは、汝よろしく、此物も、元何有の物、彼物も、元何有の物とる事を知らざし。今その一二を、いれ、毛及煙草入の革なり。元動物の體あり。故に、

動物有のりのあり。麥粉アムロありびみ、パンパンの穀類アムロを以て製つくるものあり。故に植物有の物とす。机アムロ及び腰掛アムロもまた材木を以て作れるが故に植物有の物あり。家を建つる時、用ゆる石、土、石灰、錢アムロあどい、皆金石有の物あり。

繪啓蒙訓話卷の一下終

卷の上の問

第一 土地と大陸との問

高き所より四方を見れば、しつづの物を見よや。  
○しつづあるを、遠方と、しよや。○靑色の帯の先は、一品も、あるを。○何を大陸と、しよや。

第二 旅行の問

旅行といふ、あるを、しよや。○大なる旅行をする人、何を、しよや。○地理學の、しつづ、あれよや。  
○地理學の、しつづ、あれよや。

第三 丘と山との問

土地の何れの所も皆よくひく。あま物ありや。○  
 坂を下る時、らく。○登路をゆく、らく。○  
 骨折りて登路を登り終れば、らくの所、至る  
 や。○丘とも、何如ある所、茂りや。○何如様ある  
 所を頂とりや。○丘より、高く、子供等、  
 頂までゆく、らく。あま、らく、所、何と名付るや。

第四 谷と平地との問

山と山と、又、丘と丘との間の窪を、何とりや。

○如何様あるを、小谷とりや。○谷に居る時、  
 汝よく、丘の先を見、否や。○平あり、大抵高  
 低の、あま土地を、何とりや。○牛馬を、けれ、  
 草を食むる、牧場、米、外入用の品を  
 植ふる所、田畑、あま、如何ある所、あま。

第五 水源と小川との問

谷間の田畑、あま、牧場の平、ある所、  
 物ありや。○何を、水源と、りや。○泉の水、土地  
 湧出、其後、りや。○小川、何如

あつて、らあや。○小川の子供もよくとびあさ  
 るべし。又、その水多き。火まう。底の石あど。明  
 む。分るや。否や。○小川。沿て下れ。らあや。○小  
 川の。水。水源。近づく。す。次。第。み。ち。れ。を。  
 遠さるや。○い。ろ。く。水。の。水。源。遠さる  
 を。知。る。く。ま。や。○水。の。流。る。様。子。い。ろ。く。○水  
 の。石。行。き。當。つ。と。た。り。い。ろ。く。○何。故。激。流。の。  
 小川ありや。○小川道と。何をりや。○小川道  
 の。両。縁。を。何。と。名。付。る。や。

第六 川の問

廣き小川あひ集り。その流を。あつと。名づ  
 らるや。○川道。小川道より。廣き。狭き。○川  
 あり。あふ。大。抵。舟。を。浮。べ。て。乗。り。行。く。や。

第七 河の問

河と。あふ。を。らあや。○諳。覺。ゆ。し。と。り。ひ。し。  
 三。條。何。か。ありや。

第八 池と湖との問

水の流る。傾。き。て。平地。と。あれ。が。その。水。らあ

があらや。○流れざる水深くして火し廣きを何  
とらや。○湖とん如何様あるいのをりふや。○  
湖の大あるいのいりいり。ありや。

第九 海の間

海、何如あるいのぞや。○海も如何して渡る  
こや。○濱邊に立てばよく向ひの濱邊を見る  
しや。○海の水、飲むづまりあや。○海の水、  
何故も飲むづまらざるや。○川の水あらびふ池  
の水、飲むふよろしきり否や。○川の水あらび

ふ池の水、何故も飲むづまや。

第十 島の間

島とん、何をりふや。○島の四方いりいりあや。  
○海の中あも亦島ありや。○海の島いりいり。○  
大ある島の状いりいり。

第十一 氣候の間

夏、如何。○夏、何故も日陰を好むや。○冬、何  
故も多く衣服を着るや。○熱國とん、りらあ國  
を。りふや。○りらあ國を寒國とん、りふや。○日本

の如き國を何とらふや。○何を氣候とらふや。

第十二 植物の問

「カフエ」の木は、何れの國の植物ありや。○寒燠適度國ありや。いづれの植物を生むるや。○寒國の植物は、いづれ。○植物即草木は、其國の氣候より一様あらざらう。りや

第十三 動物の問

動物も氣候より一様あらざらう。○日本は、何如様ある動物ありや。○駱駝、虎、象、日本に生く事ありや。否や。○馴鹿は、何如様の獸ありや。何れの國の動物ありや。○何れの國も皆動物も植物もありや。否や。○動物も植物も國よりて、其種類の異ありや。何故とや。

第十四 地球の分の問

地球の大別は、何程ありや。○五洲とい、何々をいふや。○東も大あり。大陸は、何處とや。○「アメリカ」洲は、いづれ。○大洋洲は、何處とらふ。あれとや。○何故と、大洋洲とい、名付しや。

第十五 帝國日本乃問

吾も汝も共ふ。住む所のよき土地の名。何とい  
ふや。○日本。五洲の何洲かありや。○本國とい  
何をいふや。○いふある。人も日本人といふや。○  
日本。府の數。いくつ。縣の數。いくつ。州の數。い  
くつ。藩屬幾國。いくつや。○日本の。最も大なる。  
町。何道の何國かあり。其名。何といふや。○  
吾等の。天子。何處か。いふや。○日本の。政府  
の。何處か。ありや。

卷の一下の問

五感の問

汝の手を縛り。鼻と耳と。或塞ぎ。目を覆ひて。汝を  
抱え。花園の中。置き。汝。今。汝が。居る所を。  
知るべし。や。其所。あるものを。見る事を得べし  
や。晝。夜。を。知り。分くべし。や。○何故。自分の  
居る所を。知ら。其所。あるものを。見る事。何  
んぞ。又。晝。夜。を。知り。分る事。あるんぞ。や。  
○鳥。鳴け。よ。之を。聞き。子供。説話を。れ。ば。よ。

之を知る。○何故。鳥の鳴き聞く事。何とぞ又子供の説話を。知る事とある。○花より。よき香あるを。汝何故。之を嗅ぐ事。何とぞ。○何故。搜りて。今何處に居る。周圍あり。如何ある。何の事ある。知る事。何とぞ。○何故。一歩も進む事。何とぞ。進めば。物に突當り。石に躓き。又池に落ち。あるや。○何とぞ。知る事。何とぞ。何事をも。為さず。あるや。○何とぞ。知る事。何とぞ。○手の紐を解き。耳と鼻との栓を。其有様。しる。○手の紐を解き。耳と鼻との栓を。

拔き。目の覆を除け。あが。其心地。いづく。

視感の間

目を覆へば。何故。物を見る事。あるや。○人間を。しる。物を見。や。むる。何とぞ。○目を以て。物を見る。働を。何とぞ。○明視。又。○明目。と。何とぞ。○目。その働を。失ひ。盲とある。何とぞ。○目。何とぞ。○何の機関。と。○聽感の間。



耳も塞げば何故ふ聞くことあるや。○聴  
 感とけ何を謂ふや。○耳の遠きもの又火し  
 聞えざらむの何と名付らるや。○聾の如何の  
 物ぞや。○聾の如何の。不自由ありや。○汝元  
 如何して説話を學び得しや。○何故ふ説話を學  
 ぶ事あるや。○如何の如何のを吐  
 とらふや。

嗅感の問

香ある花を興つあはれ汝一度之を見し後如何  
 するや。○縛られたる花園の中み居る時何故  
 花の香を嗅ぐことあるや。○嗅感とけ何  
 をりよや。○天より人み嗅感を授けし何  
 為りぞや。○食ひてよろしきもの香如何。○毒  
 なるものいかに。

味感の問

汝如何して食物の味を知り分らるや。○味の  
 機関の何ぞや。○何より味感とらふや。○天より  
 人み味感を興するもの何の為ぞや。○味のあ

しきもの、食ひて、よろしき。如何。

觸感の問

是まぐ。知らざる物の軟あると硬さと重さと輕  
さと温あると冷あると。如何し之を知る

しや。○何もち。觸感とりよや。○觸感の機關の何

ぞや。○跣みて歩まん。如何。○身體の他部物に觸

る時いづ。○何故不皮膚の皆觸感の機關は

るや。○何々を五感とりよや。○視感の機關の何

ぞや。○聽感の機關の何ぞや。○嗅感の機關の何ぞ

や。○味感の機關の何ぞや。○觸感の機關の何ぞ

光の問

夜燈を消さば。いづ。汝も物を見るべしや。○

目。視感の機關あるを目を開きて物を見ざる

の何故ぞや。○物を見るに必用あるの何ぞ

や。○光あるとさ。如何。○晝の間吾等を照らす

りの何ぞや。○雲の日を覆ふ時。日の光如何

全く吾等も届らざるや。○日の全く照らす

るちとありや。○夜に如何して物を見るや。○燈の光に日の光を較ぶれば如何。○夜に毎常暗黒ありや。○月の光にいく。○月を毎夜いづる。

色の問

夜汝を起して吾が持てる所の物に何色ありやと問さば汝如何答へんや。○色を現るもの何ぞや。○光ある時はいく。○薔薇に何色山吹に何色天に何色木の葉と草とは大抵何色ありや。○諸の色の基とある三色に何々ぞや。○青色と。

黄色とを配合すれば何色と為るや。○青色と赤色とを配合すれば何色と為るや。○黄色と赤色と集すれば何色とあるや。○日没の雲に何色ありや。○複色といふ何をいふや。○何故に青色と黄色と赤色とを單色と名付くるや。

形の問

木の葉に大抵皆同じ色あるか。何れ依りて梅の葉と櫻の葉と桃の葉とを見分くるや。○形といふ何をいふや。○形の何の目徴ありや。○形を知り

分るるりの何感ぞや。○物の形に種々ありや、  
否や。○橙實の形にいく。○柳の葉の形に如何  
○金銀の貨幣に其形いく。

三有の問

木像に目も有り耳も有り手も有り物を見る  
とと何となく音を聞くとあるを物を探る  
とやあるにざるん何故ぞや。○動物のよく歩  
よく音を聞きよく物を見ら何故ぞや。○猫に  
いづの響ありや。○犬にいく。○鳥類に如何

鶏にいく。○動物も足らざるりのありや。○  
動物に於て思慮の代と為るりの何ぞや。○生  
命あり自然知覚ありてよく自在に動くりの  
一世界を何とらふや。○生命にあれども自在に  
動くるとあるにざるりのありや。○薔薇も亦  
生命ありや。○薔薇も生命ある證據にいく。○  
薔薇に自ら動きて其居所を變るる事ありや。○  
薔薇と動物との違にいく。○何故に薔薇を植  
物とらふや。○植物の一世界を何とらふや。○石

如何よく自ら轉びて其居處も變多う。又自然知覺ありや。否や。よく物を見ろ。よく音を聞ろ。之を碎うば痛を覺ゆる。如何○石。何故動物もつゞぎるや。又何故植物もあつゞるや。○石并ふ金銀土砂の類の一世界を何とらふや。○筆の毛及び煙草入の革。何有の物ありや。○粉粉パン。机腰掛。何有の物ありや。○石灰土石鐵もど。何有の物ありや。

董邨水多澄書

# 發兌

東京馬喰町二丁目  
島村利助

同日本橋通三丁目  
丸屋善七

# 書肆

備中笠岡  
細謹社

